連載 関係からみた子どものこころと育ち

第9回

母子関係の回復過程にみられる母親の不安

小林　隆児　Kobayashi Ryuji　大正大学人間学部臨床心理学科教授

自分の世界に没頭する自閉症児

I男：4歳0カ月，(知的発達水準)軽度遅滞。

主訴：ことばの遅れ，視線回避，会話が一方通行，オウム返し，独語，偏った好み。

家族構成：父方祖父母，両親，3歳上の姉の6人家族。

発達歴・現病歴：胎生期はとくに問題はなかった。出生時，臍帯巻絡で1分ほど産声をあげなかった。乳幼児期は喘息がひどく，生後1年は寝てばかりであった。そのころから視線を回避し，無表情で，もの静かな子であった。人見知りがなかったために，手のかからない子だと思っていた。1歳前にはハイハイをせずにいきなり歩けるようになった。1歳6カ月時健診では保健師からはとくに異常は指摘されなかった。2歳時健診のとき，初めてことばの遅れを指摘された。ことばはなかなか出てこなく，2歳半になってようやく発語。3歳時健診のとき，保健師から母子通級の活動を勧められたが，I男はいやがるのですぐにやめた。

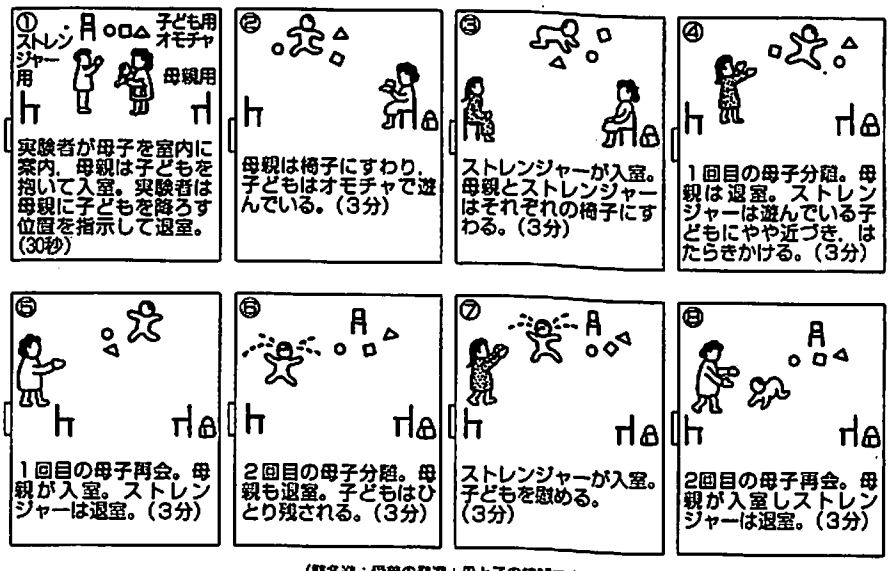
その後，スプーンやフォークをお守り代わりのように四六時中握って放そうとしない時期があったが，いつの間にか消えた。3歳半のときに，こども病院を受診。脳波と聴力の検査を受けたが異常なし。発達の遅れを指摘された。

幼児期～現在まで，自分の世界に没頭することが多く，天井を見て笑い出したり，手をヒラヒラさせたり，ブツブツと一人で物語をつくってつぶやくことがしばしば見られる。自分から何か言うときには独特なことばを使うことが多く，コミュニケーションは難しい。聞かれたことに対してオウム返しで答えることも多い。

現在は保育園に通っている。入園後，初めの3カ月は泣くことが多く，母親となかなか離れられなかった。しかし，保育園に慣れるにつれて，いままでできなかったことも少しずつできるようになってきた。集団行動にも少しずつ参加できるようになってきた。両親が自閉症を疑い，筆者の外来を受診した。

臨床診断：自閉症。

小児看護，32(12)：1660-1664，2009.



(繁多進：愛着の発達；母と子の結びつき．大日本図書，東京，1987，p 79．より引用)

図1　新奇場面法

SSP (新奇場面法)の特徴

以下，図1の番号に沿って説明する。

①スタッフが母親にSSP (Strange Situation Procedure，新奇場面法)について説明した。母親ははきはきと返事をしながら聞いていて，とても協力的な態度である。

②I男は入室するなり，机の上に置かれた細々とした遊具を手で扱い，物色している。母親も一緒になってI男の興味を引くものがないか探している。〈I男ちゃん，消防自動車あるよ！〉〈I男ちゃん，トーマス(機関車)あるよ！〉と次々にI男に見せる。それに付き合うようにしてI男は母親のくれた玩具を手にとって扱うが，興味を引かれないのか少しだけ扱ってはすぐにほかの物に気が移ってしまう。母親はなんとかI男の関心を引きつけようと懸命になってI男の名前を呼びながら，玩具を次々に手にとって見せる。I男が野菜や果物を手にとって包丁で切り始めると，I男の動きに合わせて〈よいしょ！〉などと声を懸命にかけている。母親の懸命さがとても伝わってくる。しかし，どこかI男の気持ちは乗らず，引いてしまっているように見える。

③ストレンジャー(ST)が入室すると，すぐに母親が気づいて挨拶をする。I男は先ほどから野菜や果物を手にとって包丁で切っている。母親はI男に〈I男ちゃん，こんにちはは？〉と挨拶をするように促す。するとI男は包丁を扱いながら〈こんにちは〉と小声で気のない返事をする。母親はI男の顔をSTのほうに向けさせようとする。しばらくして，I男が包丁で野菜を切っていると，それに合わせて〈よいしょ〉とかけ声をかける。そしてすぐに，切った野菜を〈今後は切ったのを(先生に)はいどうぞ〉とSTに差し上げるようにとI男を促す。I男はなんら抵抗なく手にとって，STに近づいて手渡す。

母子2人でままごと遊びをしているように見えるが，母親の活発なはたらきかけが前景に出て，I男の動きはどことなく控えめで楽しそうな感じは受けない。母親の誘いや促しに素直に従っているように見えるが，I男はどことなく動かされている印象が強い。母親のI男へのことばかけがとても多いのに比して，I男の発語はほとんどみられない。

④母親はスタッフの誘導にすぐに反応して，〈はい，すみません〉と言いながら退室。I男に対してとくに合図を送ることはない。I男もとくに目立った反応をすることなく，同じように野菜の包丁切りを黙々と続けていたが，30秒ほど経過すると突然，野菜を持っていた前腕に力が入ってひきつけるような動き(不規則な

不随意運動と思われる)が数回出現する。まもなく唐突に意味不明の独り言をつぶやき始める(この発声も声のチックと同様の不随意運動と思われる)。STはずっと黙って椅子に座って眺めている。2人の間になんともいえない緊張した雰囲気が感じとれる。

⑤母親が黙って入室。I男は母親に気づいてドアのほうに視線を向けるが，すぐに再び野菜に視線を移す。I男がしばらく何もしないで立っていると，母親はおもちゃを扱いながら積極的にI男を遊びに促し始める。相変わらず，I男の発語はまったく聞かれない。

⑥スタッフに促されて母親は黙って退室する。I男は母親の出て行く後ろ姿を目で追っているが，後追いすることはない。ただ呆然と見送っている。10秒ほどすると突然先ほどと同様の独り言をつぶやき始めるが，先ほどよりもかなり大きな声であり，緊張の高いのが印象的である。机から離れて積み上げられたブロックの上に登り，ブロックを手で思い切り叩いては独り言を発してブロックから降りる。すると次に大きなボールに近づくが，少し触れるだけで今度は机のほうに再び戻る。先ほどやっていた野菜の包丁切りである。このように何をやっていても集中することはできず，落ち着かない様子である。母親が退室して3分近く経過したころ，突然ドアのほうに接近しながら独り言をつぶやく。しかし，ドアを開けようとはしない。まもなくしてSTが入室した。

⑦STは椅子に座って静かにI男を見守っている。I男はSTにとくに関心を示すことはなく，先ほどと同様に1人で黙々と包丁切りをしている。しかし，1分半ほど経過すると，突然独り言をつぶやき始める。I男は天井に向けて前腕を差し上げながら何か語りかけるように大声を発しているが，まったく意味不明である。STはどのように応答してよいか困惑ぎみで，じっとしているだけである。

⑧母親との再会。母親の入室にすぐに気づいてドアのほうを見るが，すぐに先ほど扱っていた玩具のほうに視線を移す。玩具を扱っているI男に近づいた母親は，「I男ちゃん，何していた？」と尋ねながらI男と一緒に何かをしようと語りかける。I男は先ほどから机の上の玩具ばかりに注意が向いていたが，まもなく母親は部屋にあった滑り台を指さして〈I男，滑り台があるよ〉とI男を誘い始める。すると驚いたことに，I男は玩具を両手に持ったままで，勢いよく(というよりも唐突に)滑り台のほうに走っていき，滑り台の階段を登っていく。母親は両手に持っていた玩具を見て，〈あぶないよ，1つちょうだい〉と促すと，すぐに母親に1つ手渡してから滑る。1回滑っただけで，ふたたび先ほどの玩具を扱い始める。まるで，ほかの遊びをしていてもここに戻ることによってI男は多少なりとも安心しているように見える。母親は机に置かれた玩具でI男が知っていると思われるものだと，それを取り出して〈これ何？〉と幾度も尋ねている。I男が反応しないと執拗に何度も尋ねている。I男は〈何？〉とオウム返しで反応しているばかりである。ただ，I男が自分で玩具を扱いながら突然〈できた！〉と大声で叫ぶ。しかし，母親はさきほどと同様に〈これ何？〉と繰り返し尋ねている。母親はI男にはたらきかけることに懸命になっていて，I男が何をしようとしているかを感じとるゆとりがないのが印象的である。

母子のかかわり合いの特徴

SSP開始前の説明時，母親は自分が不在になってもI男はなんの反応もしないだろうと予測していたが，実はそうではなく，I男は後追いをしたり，泣いたりしないだけであった。

母親の不在に対して情動面の激しい混乱を示し，ついには不随意運動と思われるような奇妙な反応(チック様発声，前腕のけいれん様運動)を見せている。さらには1人でつぶやくようにして空を見つめている。一見すると奇妙な印象を受けるが，近くで見ていると非常に痛々しい感じのする反応である。母親の熱心なI男へのはたらきかけには回避的な態度を示しながらも，いざ母親が不在になると，明らかに不安は高まっている。しかし，母親を求めるような直接的行動をとることはできない。非常に強い動因的葛藤が認められ，ついには葛藤行動としての不随意運動を思わせる反応が生じている。

母子関係の回復過程

初期，筆者は母親に対して，過剰な関与を控え，子どもの動きに合わせて対応するように幾度となく助言していった。I男はすぐに自発的・能動的にふるまうことは難しく，親，とりわけ父親が唐突に遊びに誘うと，すぐにそれに乗ってしまうという傾向が強く認められ，主体性が極めて弱いことが感じられた。しかし，1カ月もするとしだいに活動的になっていったが，親には頼ろうとせず過度に自立的に行動するのが印象的であった。

1カ月半後，I男の自己主張はより強まっていった。すると母親はI男の自己主張の強さに困惑し，これからしつけをどうしたらよいかと不安を示すのだった。

4カ月後，Ⅰ男の自発性や能動性は全面開花。非常に活動的になった。すると，母親はⅠ男をさかんに褒めるようになったが，その過剰さがわれわれにはとても気になってきた。あまりにも母親が褒めることによって，Ⅰ男はそれに乗せられてしまう傾向が強まっていく懸念が生じたからである。子どもの動きにあまりにも過剰に合わせすぎる母親の姿が印象的であった。このことを取り上げていくと，母親の口から，自分が子どものころ，母親に褒められるように頑張ってきたことが回想されるようになった。母親自身が自分の母親の期待に沿って頑張ってきたこと。そして，いまは母親としての自分が子どもに対して過度に褒めることで，自分の期待に沿って子どもを動かそうとしていること。このように自分が育ったように子どもを育てようとしていることに気づくようになった。つまりは母親自身のあまりに高い自我理想が，ここではⅠ男との関係において阻害的にはたらいていることが明らかになった。そこで，われわれはⅠ男の主体性が損なわれないように考慮しながら，母親の混乱を面接のなかで支えていった。このころ，再び葛藤行動が強まってきていたことから，Ⅰ男の葛藤が増強していることがうかがわれたからである。

するとまもなく，母親は遊びのなかで，自分が見捨てられそうな不安を起こしたのであろうか，Ⅰ男にしがみつくような振る舞いが頻繁に見られるようになっていった。まさに母親自身の子ども時代の姿が露呈していったのである。しばしば母親は「頭ではわかっていてもどうしたらよいかわからない」という困惑状態に陥っていった。このころのⅠ男の心境は母親には「干渉されるのはいや，でも放っておかれるのもいや，ちゃんと見てほしい」と見えるのだった。

しばらくは母子の緊張関係が持続していたが，11カ月後，大きな転機が訪れた。転居の際に，3世代同居の住居を，2世帯を分離する形にしたことであった。この決断は父親と母親の話し合いの結果であったが，ここで父親は大きな役割を果たしている。

支援開始からちょうど1年経過したころからⅠ男はそばでつきあっていたセラピストを激しく排除するようになり，母親への強い甘えが顕在化していった。他者を寄せつけない母子密着の状態に傾斜していった。このようなⅠ男の変化に対して，母親はそれまでの先取り的関与がまったく影をひそめ，しっかりとⅠ男の甘えを受けとめることができるようになっていった。

その後，Ⅰ男の遊びへの興味・関心が強まるとともに，今度は父親がⅠ男の遊びの世界を広げてくれる役割をとれるようになっていった。

母親の高い自我理想と見捨てられ不安

以上の経過を振り返ると，母親の過剰なほどの関与の背景には，母親自身の高い自我理想があったことがわかる。母親自身が子ども時代，自分の母親に褒められることでもって自己評価が保たれてきたのであろう。そのため，親になった自分が熱心に親としてかかわろうとしていたにもかかわらず，Ⅰ男から拒絶されることによって強い不安に襲われ，一時はまるで子ども時代の自分が親に見捨てられまいとするかのように，Ⅰ男にしがみつくという振る舞いを示すほどであった。

しかし，転居を契機に，母親も落ち着きを取り戻し，Ⅰ男もそんな母親への甘えが急速に強まっていった。そこで本来の母子の愛着関係が深まっていったのである。このことによって，Ⅰ男の主体性，能動性はしっかりとしたものになっていったことがうかがわれた。

Ⅰ男のその後－卒園式でのエピソード

支援開始から2年3カ月後，Ⅰ男は保育園を卒業することになった。以下は母親が手記に記載した卒園式のエピソードである。

Ⅰ男，6歳3カ月。卒園式当日。

朝起こしに行くと，やっぱり「保育園行カナイ！」といやがる。何日か前から卒園式の練習をしていることもあり，当日何か言ったりやったりしなければいけないことがわかっていることもあって，普段より強い口調でいやがった。

私たちは夫婦揃って式に出席するため，黙々と準備をしていた。着替えをしていると，その様子を見ていたⅠ男は朝食をとりながら，突然「ウン！ 保育園行クヨ！」「アリガトウゴザイマスッテ言ウヨ！」とはっきり言いながら，自分からドンドン着替えだした。

自分に言い聞かせるように，決心した！ という感じであった。それから園に着くまで一度もグズグズ言わなかった。

しかし，Ⅰ男は卒園生入場のときから泣きだし，担任のT先生と手をつないで会場に入ってきた。式の間中，ずっと泣いているⅠ男の隣に私が座り，Ⅰ男は「オウチニカエロウ！ オウチカエル！」と泣いている。私は背中を擦りながらⅠ男の手を握ったままずっとそばにいた。

卒業証書授与が始まり，Ⅰ男の順番がくると，T先生は涙

…涙で「○○Ｉ男君！」と呼んでくれた。Ｉ男は泣きながら，声をしゃくりあげ，「ハイ！　ボクハ保育園ガンバリマシタ」と言い，何度も私を見て振り返りながら，園長先生のところまで行って証書を受け取り，お辞儀をし，「ワーン！」と泣きながら私のところに戻ってきた。私にまで「アリガトウ！」と一言言って証書を渡してくれた。感動して私もボロボロだった。

その後のお歌のときも，私に抱っこされながら泣きながら歌った。一生懸命頑張って無事卒園式を終えることができた。

式の間中，泣いている子はＩ男１人だったけど，最後まで頑張れたＩ男を主人と一緒に見ることができたこと，式に出席できたことはとてもよかった。園に通えた日数は少なかったけど，保育園で先生方に見守られて過ごしたこと，お友達の優しさに触れたこと，Ｉ男もきっと覚えていると思う。

Ｔ先生はこう言ってくださった。

「Ｉ男君がいたことでクラスのなかが温かくなって，みんながやさしくなれました。先生たちが教えてあげられないとっても大きなことをＩ男君は教えてくれました。Ｉ男君，ありがとう」って…。

私にとって何よりうれしい言葉となった。Ｉ男にとって人と触れ合うことの難しさや，初めての集団生活を経験した。私もＩ男と一緒に泣いたり笑ったりした保育園生活だった。

家に帰って「よく頑張ったね」と言うと，嬉しそうな笑顔のＩ男。本当によく頑張った。

思い出に残る卒園式だった。

神戸市看護大学 第11回国際フォーラム

今日の複雑なヘルスケア事情における臨床判断と患者の安全性

Clinical Judgment and Patient Safety in Today's Complex Health Care

今回の国際フォーラムでは『ベナー看護論』の著者であるPatricia Benner（パトリシア・ベナー）博士をお招きします。Benner博士は，健康，ストレスとコーピング，技術獲得，そして倫理に関する国際的に認められた研究者です。Benner博士の研究は，アメリカ合衆国だけでなく世界各国で，看護実践や教育のデザインに用いられています。またその研究は，看護にとどまらず臨床実践や臨床倫理の領域に大きな影響を及ぼしています。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

■講　師：Patricia Benner（パトリシア・ベナー）博士
カリフォルニア大学サンフランシスコ校　名誉教授
（通訳あり）

■日　時：2009年12月２日(水)　18：00～20：00

■場　所：ユニティ［UNITY］（神戸研究学園都市大学共同利用施設）
（神戸市営地下鉄「学園都市駅」徒歩１分）
※開催場所は神戸市看護大学ではありません。お間違えのないようにお願いします。

■参加費：一般3,000円，学生500円（当日会場にてお支払いください）

■参加申込：往復はがきに，住所，氏名，電話番号，一般・学生の別をご記入のうえ，下記宛にお申し込みください。申し込み締め切り日：11月20日(金)必着。
ただし，応募者多数の場合は，抽選させていただきます。

■問い合せ先：
〒651-2103　神戸市西区学園西町3-4
神戸市看護大学　第11回国際フォーラム　事務局
TEL：078-794-8080(代)